第十七章　幼稚園における子どもたちの庭*

（挿絵第一六表参照）

人間および子どもが自然を心からよく知り、自然と心から融合することが、自己の天職に向かっての子どもの発達にとって、人間の教育にとって、諸民族および人類の陶冶にとって、はなはだ重要であるということは、この著作においてすでにいろいろな面から強調してきたところである。じっさい、自然をよく知り、それと融合することは、一面からみると、個々人ならびに全人類の実りの多いかつ祝福にみちた教育および陶冶の確固たる基礎なのである。なぜならば、われわれが自然を神の直接の行為の啓示として、もしくは神の最初の啓示として考察する時以上に、われわれは自然の全本質をより確実に、自然のあらゆる関係をより十分に、またより生き生きととらえることはできないからである。しかしわれわれは、この重要性をいまだ個々にわたって展開していないのである。この重要性はしかし、自然の生成と発展のなかに示され、とくに自然の生成と発展を人間の成長発達と比較して観察する場合に、したがってまず第一に自分自身の成長発達と比較して観察する場合に示されるのである。

ところでこの比較的な観察は、人間自体および人間一般にとって重要であるが、それはまだもっぱら成長し自己発展しつつある人間、すなわち子どもや青年にとってとりわけ重要である。こうして十分で全面的な教育、したがって幼稚園の本質は、必然的に、そのための機会が子どもにあたえられることを要求する。幼稚園（Kindergarten）という言葉は、もしわれわれがその言葉を支えている語に注意をはらうならば、自らその方法（Wie）と手段（Wodurch）をわれわれに語ってくれる。すなわち、それは「子どもたちの庭において」（im Garten der Kinder）である。したがって幼稚園、幼稚園の完全な理念、もしくは明瞭に表現さ

※原註　これに関して明瞭な観念をあたえる一枚の石版刷りの図が添えてある。

れた幼稚園の思想は、必然的に一つの庭を要求し、さらにこの庭のなかに、子どもたちのためのもろもろの庭を要求する。しかし子どもたちの庭を幼稚園と結合すべきだという要求の必然性は、単にいま述べた高次の理由からだけではなくて、さらにまた社会的・市民的な共同生活の理由からもあらわれてくるものである。というのは、人類の一員としての人間、すなわち子どもは、早くから個人としてまた個別なるものとしてと同様に、より大きな全体生命の一員としても認められ、取り扱われなければならないのみでなく、そのようなものとして自己自身を認識し、それを行為によって示さなければならないからである。しかし個別的なものと統一的なもの、部分と全体との間のこの相互活動が、自然や作物の共同の世話におけるより以上に、また特殊なるものに対する一般的なものの関係が明瞭にあらわれる、一つの庭の共同の世話におけるより以上により美しく、より生き生きと、またよりはっきりとあらわれるところはどこにもない。いわゆる家庭園がそういうものであるが、そこではどの子どもも自分の小さい庭に彼の場所をもっている。しかしいまここでいう幼稚園の子どもの庭では、子どもの数が多く、そしてここでは子どもたちや子どもたちの庭がいわば主要事であるから、いくらか配置を変えなければならない。ここでは子どもたちの庭やそれぞれの小花壇は、ちょうど特殊的なものがつねに一般的なものにおいて保護されて安住し、一般的なものが特殊的なものを保護しながら取り囲むように、共同の庭によって取り囲まれなければならない。

しかし子どもたちのこの庭は、一般的な目的のほかに、特殊的なものの一般的なものに対する関係、部分の全体に対する関係、いわば子どもの家族に対する関係、市民の共同社会に対する関係をあらわさなけ

ればならないし、本質的には単にこれらの関係に関して発展的であり、教育的であり、そして教訓的であるのみでなく、さらに事物に関してもまた、そしてここではとくに作物と植物に関しても発展的であり、教育的であり、そして教訓的でなければならないのである。ところがこのことは、子どもにとって子どもが比較を求められることによって行なわれ、またこのことは、対象物、ここでは作物や植物が相互に比較されることによって再び示される。

これらすべてのことから、幼稚園における子どもたちの庭のための土地もしくは場所の区分のために、次のことが明らかになり確認されるであろう。

一、子どもたちのための庭の全空間は、長方形の形が最も適当である。その他の単純な形、すなわち円形や楕円形も、べつだん排除されるものではない。けれどもそれらは、とりわけ多くの子どもたちのいる場合には、全体の目的にとって長方形ほどふさわしくないように思われる。

二、さてこの全空間は二つの部分に分けられなければならないであろう。つまり共同の部分と個々の（すなわち子どもたちのための）部分とに、あるいは別の言い方をすれば、全体のための部分と個個の成員のための（すなわちもう一度言えば、子どもたちのための）部分とに分けられなければならないであろう。

三、共同の部分は取り囲み、いわば保護するものであり、子どものための部分は取り囲まれ、いわば保護されるものである。

四、子どもたちは決してこの庭によって植物界の全体へ導かれることはできないし、またそうすべきで

もなくて、むしろ単に人間の必要に最も近い部分のみへ、したがって畑の作物と狭い意味での庭の作物とへ導かれ得るし、また導かれるべきである。こうして共同の土地は、庭の土地と畑の土地とに分けられるであろう。

五、しかし庭の土地は、さらにいわば花園と菜園とに分かれる。

六、耕地は、油性植物・穀物・さや豆類・球根類・かぶら類および青菜類のための土地に分かれ、最後に飼料用草木のための土地に分かれる。

七、自由に使える土地をもてばもつほど、人は子どもたちに彼らの庭として、より大きな土地をあたえることができるし、実際にそれぞれの子どもにひとりずつ、一区画の庭の土地をあたえることもできる。しかしもし子どもたちが大勢いて、しかも地面が制限されているときには、人は各個人あたりの地面を制限することができるし、じっさい、より小さな土地を二人の子どもに共同であたえることもできるのである。幼稚園で二人ずついっしょになることもまたいいことでもある。すなわち、それは協調性を教える。またその場合、各々の子どもは、言ってみれば、もうひとりの子どもがその花壇または分けまえにもたらす分だけ豊かになる。

土地または所有地が十分ある場合には、各々の子どもに面積四平方フィートの正方形の土地をあたえることができる。土地が少ない場合には、二人の子どもに六平方フィートの長方形の土地を共同であたえてよい。しかし子どもたちの数が多くて、提供すべき土地が少ない場合には、二人の子どもは四平方フィートの土地でやってゆかなければならない。

八、さて、全体を分割し、再び結びつける道は、本道かそれとも（個々の小花壇の間の）間道かである。ところで間道は一フィートの幅でよい。しかしもしも本道の幅を少なくとも二・五フィートにできるならば、そうした方がよい。そうすれば、二人の子どもが本道をいっしょに並んで行くことができる。

土地の区分と使用については、一般的には以上のとおりである。ところで個別的にはなお次のことに留意しなければならない。

子どもに個人別にあけわたされた小花壇には、子どもたちは彼らが欲するものを好きなように植えることができる。また彼らは自分の思うように植物を取り扱ってよい。それによって子どもたちは、植物は細心にそして合法則的に取り扱わなければならないということを、自分の不法な取り扱いから経験する。このことは、こんどは共同の庭の作物において子どもたちに示される。彼らは作物に十分な注意をはらわなければならないが、そうすれば子どもたちはその作物が種子から芽ばえて成長し、開花し、結実する過程を通って再び種子になるまでの発達を静かに観察することができるのである。

それゆえにまた、共同の土地の播種、もしくは植えつけのさいに、子どもたちにさまざまな作物の種子を見せて比較させたり並べて置かせたりして、共通の特徴と異なった特徴とを見つけ出させる。そうすれば子どもは種々の作物の名を言ったり、その種子を識別したりすることができるようになる。夏と秋には（種子が熟した後には）同様に種子は再び集められ、そして冬に利用するためと

（これに関しては幼稚園における冬の作業に関する後の論文においてさらに詳しく述べる）、春に再び植えつけするために、できれば前もって子どもたち自身が作製した紙箱のなかに貯蔵される。（これに関しては子どもの作業に関する一般的ならびに個別的報告においてさらに詳しく述べる。）すでに他の所で育てられた苗をこれらの庭に直接移植される作物についても、同様な方法で比較的かつ観察的に取り扱われる。

各々個々の小さな庭もしくは小花壇の清潔の保持と、絶えず良好な状態の維持については、それぞれ個々の所有者が配慮しなければならない。しかし共同の庭の土地の清潔の保持と良好な状態の維持については、全員が共同して、あるいは何人かの者がいっしょに交代制で（とくに一定の日に、たとえば水曜日と土曜日の午後に）配慮しなければならない。

ところで作物を眺めたりよく観察したりするさいに、直ちにそれらの名前も子どもたちの心に浮かぶようにするために、もしもこれらの名前が、すでに子どもたちが彼らの遊びや作業を通じて読めるようになっている線文字で板に書かれて、各々の作物や植物のそばに立てられるならば、それはよいことである。さらにこのことによって子どもたちには、全体についての一つの明瞭な概観と完全な洞察とが印象づけられるのである。

もしも各々の子どもの小花壇に、前に述べたと同じ方法で子どもたちの名前がついていれば、その成果は全く同様に多面的である。どの子どもも、直ちに彼の友人の花壇を見つけ出す。そしてどの子どもも自分の花壇のそばに立っている名前によって、自分がその花壇をこれまでぞんざいに取り

扱ってきたか、あるいは注意深く取り扱ってきたかに応じて、正当な無言の賞讃か、あるいは正当な無言の非難かを受けとるのである。

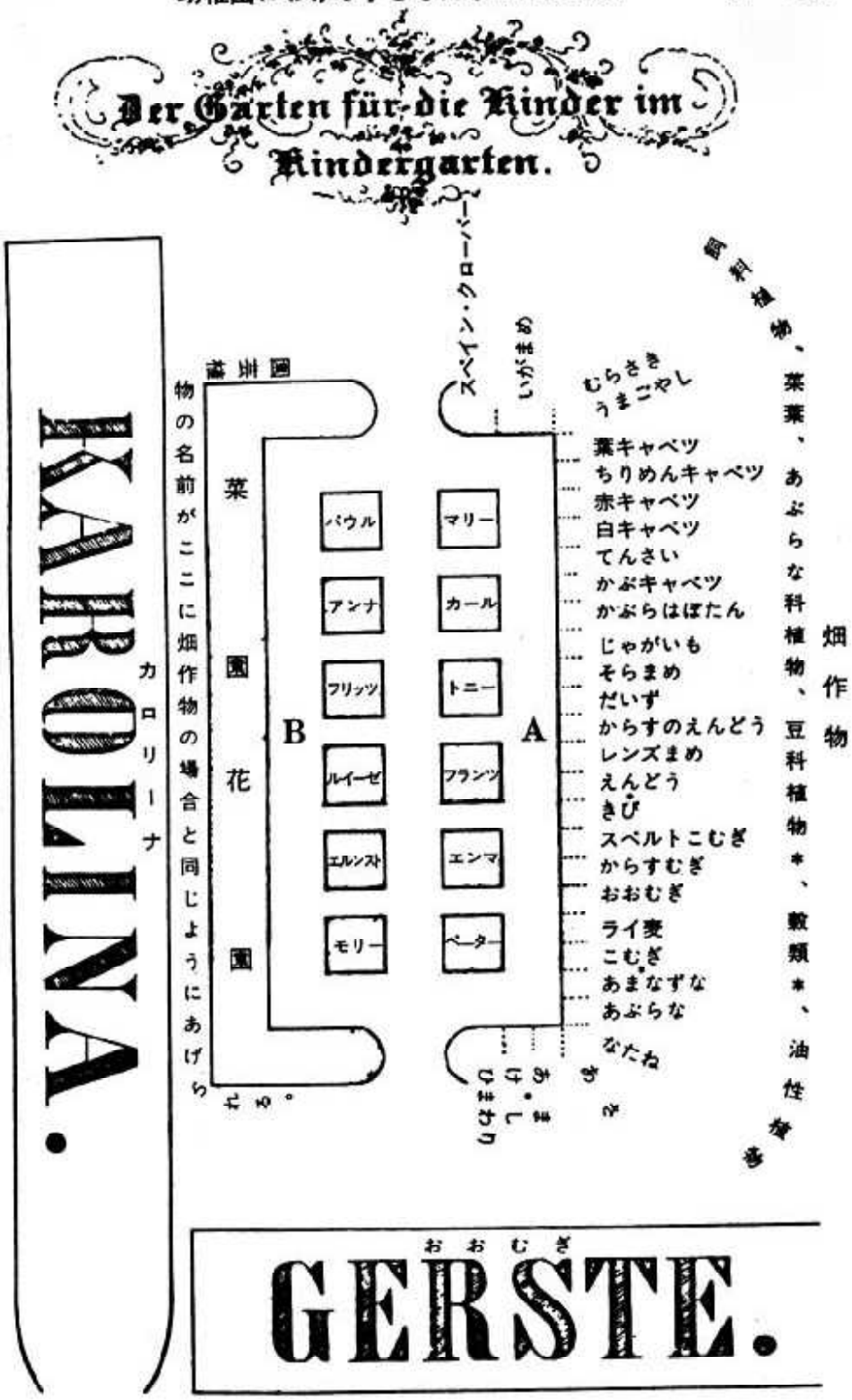
さらによいことは、文字の知識および読み方の劣っている子どもは、その記号から名前を見つけ出そうとつとめることによって、これら両方の名札において訓練されるということである。

最後に子どもは、すでに前に狭い意味で述べたように、これらすべてのものを通して、全体に対する完全な概観と明瞭な洞察とを受けとり、それによってとりわけ記憶力がそのあらゆる面にわたって強められる。たとえば、場所の記憶、事物の記憶および名前の記憶、また特性の記憶、いな時間の記憶も、作物およびそれらの世話のさまざまな発展段階を通じて強められるのである。

しかしこれらすべてによって子どもたちの庭の意義と効果とは、決して論じつくされてはいない。子どもがこの庭において真の家庭生活、真の市民生活（そこでは全体的で一般的なものは個別的で特殊的なものを保護し、逆に後者は前者に対して促進的に働き返す。）の一つの像を認めるように、子どもはそれぞれの対象物において、その対象物の生成・成長・凋落を通じて、すなわち、その対象物が一個のものから発展して再び一個のものの表現にたちかえることを通じて、彼自身のよりよい理解と、より正しい把握のための彼自身の一つの像、一つの対型を見出すのである。

しかしながら(たとえ単におぼろげな予感にすぎないとしても)、早くから自分の発達の過程や自分の自然的ならびに一般的な発達段階に通じるということは、人間にとって計りしれない利益である。そして少年や少女は、洞察をもち経験をつんだ人びとの一致した十分な指導のもとでのみ、彼らの小さな庭の世話

幼稚園における子どもたちのための庭　第一六表



を通じて、また作物の注意深い世話を通じて、すでに早くからこの予感に到達することができるのである。

願わくは以上述べてきたことが、表現と実行に関する限り、さらに付録の表（前頁）を説明するのに役だってほしいものである。

この庭は状況に応じて一二人または二四人の子どもたちを予想したものである。花壇の数を庭の縦あるいは横の方向にふやしていけば、それぞれ子どもたちの数だけ十分な数の小花壇を得ることもできる。ここでは一人の子どもにあるいは二人の子どもに対して四平方フィートの小花壇があてられている。――境界路はそれぞれ幅一フィート、本道はそれぞれ幅二フィートである。周りを取り囲んでいる共同の花壇の幅は同様に二フィートであり、その縦の長さは花壇に植えられる果物と作物の数に応じて等分される。この計画においては、それぞれの作物の種類に対して、連続した方向に一フィートずつあてられている。したがって二平方フィート、もしくは二フィート平方ずつあてられている。

Aの側は畑作物に、Bの側は園芸植物にあてられる。前者(A)の順序と比較するためのグループ分けは、表に示されている。園芸植物(B)の順序と比較するための配列は、前者から容易に明らかになる。幼稚園においては、合目的的に秩序だてられた全体のなかで、子どもたちの小さな庭や小花壇のためにこれ以上大きな空間を見出すことは、残念ながらあまりにも困難であるので、ここではいろいろな寸法、とくに道幅はできるだけ小さくされている。このようにして庭全体は、縦がわずか二五フィート、横はわずか一四フィートにすぎない。しかし本道には少なくとも二・五フィートの幅をみつもるのがより適切である。

名前の木札のうち、子どもの名前の札は、ふつう幅が約一・五インチ、長さもほとんど同じである。

（ただしこの長さはおよそ三インチだけ幅より長くてもよいであろう）。植物の名前の札も同様である。ただし幅は同じであるが、長さはやや短い。それぞれの木片の厚さは1/4インチである。

したがってこのような木札は、園の作物の種類の数と子どもの数だけ必要である。またもしも子どもに比較させて、薮を教えたいと思うならば、全園を取り囲んでいる生垣によってそれをすることができる。

すでに数年間存続している幼稚園では、子どもたちの自然と植物の知識をいっそう高めるために、三年目および四年目に栽培植物の代りに野生の植物（草・雑草など）の種子をまいてもよい。

ところで認識にともなって心情をも高めるために、（顕花植物と陰花植物の比較観察を共同的に行なったように）種子播きと作物の植えつけをも共同的なもの、したがっていわば祝祭的なものにするとよい。しかしこれに、なおいっそうこういった表現と印象とをあたえるために、幼稚園教師は庭の植えつけの時、意味づけをし、かつ子どもたちを鼓舞する次のような歌をそえてやるとよい。

*さあお庭にゆきましょう
わたしたちの種子を播きに
あたたかい空気が谷にみちると
**種子は緑の芽を吹き花を咲かせます
などなど

* Laßt uns in die Gärtchen gehen　** Samen grünet, sprießt u. blüh't

後になって、種子が発芽し植物が成長すると

さあお庭にゆきましょう
わたしたちのかわいい植物を見に

子どもの精神と認識、心情と感情、いな、実際的活動的な生活全体に及ぼすこのような自然および作物の世話の感化と影響に関しては、じっさい、もはやこれ以上一言も述べる必要はあるまい。というのは、このように全体の中心に立ち、こうして全体のなかにおいて、また全体から成長する者は、何人も真に全体をとらえるにちがいないからである。それゆえに、庭を所有している両親たちは、彼らの子どもに、あるいは子どもたちに、小花壇の世話と耕作のために十分な空間をあたえることを決してゆるがせにしてはならない。両親たちはこれによって、自然を配慮したところの単純で一致した指導のもとに、子どもたちに内面的な道徳的な高揚と強化のための一つの源泉を提供することになるであろう。

いな、ささやかな窓辺の花園や植木鉢の思慮深い世話でさえ、子どもにとって道徳的感化の一つの純粋な源泉である。自然の作用は、最も素朴な植物を通じてすら、自然の恵み豊かな影響に早くから心と感覚を開いている人に対してはきわめて教育的である。